心の譜

前県立歴史博物館
特別館長

右島 和夫さん

きょうから連載

今春まで県立歴史博物館の特別館長を務めた右島和夫さん(76)は、古墳研究の第一人者として国内外で活躍する考古学者だ。旧境町(伊勢崎市)に生まれ、進学した群馬大教育学部で「県内古墳発掘の父」とも呼ばれる尾崎喜左雄教授と出会ったことが、研究者としての方向性を決定付けた。

関西大大学院に進んだ後は奈良県立橿原考古学研究所などで実践を重ね、東日本にとどまらず畿内から東アジアまでを視野に入れた研究手法を確立。古里に帰り、県職員となって研究者としての生活をスタートさせた。

入庁後は上武国道(国道17号)や関越道などの大規模開発に伴う発掘調査を担当した。業務の傍ら自身の研究を着実に進め、1995年に博士の学位を取得。古墳時代の群馬が東日本屈指の有力地域であったことを全国に発信し、県政における「東国文化」事業の理論的支柱となった。

県を退職後の2016年春、開館以来初の大規模改修事業を進めていた県立歴史博物館の館長に就任。子どもたちや一般県民に開かれた博物館を目指し、改革を進めた。

人生のさまざまな場面で自身を導いてくれた人たちとの出会いを振り返りながら、半生の軌跡をたどる。

(本文は18面)

◇ ◇ ◇

この連載は関口健太郎が担当します。

上山春秋

大事な試合や試
商談の前になると
はつい何かにすが
くなる。身近な人
もらった手紙、
お守り、または
けの勝負めし。不思議と
が生まれ、一歩踏み出す
えてくれる▼思い出すの
知競馬のアイドルとして
を巻き起こしたハルウラ
一度も最初にゴールを駆
ることなく、成績は11
勝。連敗記録を伝える新

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ❶

出会いに導かれ

歴史、面白さ県民と共有

「県民に開かれた博物館」を目指して
歴博の改革を進めた右島さん

思ってもみなかったところにたどり着いたものだと、不思議な感慨にとらわれていた。2016年7月、県立歴史博物館は新たな門出を迎えていた。約2年に及ぶ休館を経て、歴史の面白さを県民に伝える施設として再出発したのだった。生まれ変わった歴博を見学し、笑顔で帰っていく来館者の背中を、館長として特別な思いで見送った。

館長に就任したのはこの3カ月前。未来を担う子どもたちの心に届くよう、展示の高さを従来より低く設定した。この施設が県内各地の歴史遺産をつなぐ起点となるよう、市町村などに依頼して地域色豊かな出土品を集めた。「オール群馬」の展示を目指して準備を続けてきた。

社会科が大好きで、毎日社会の勉強をしていられたらどんなに幸せだろうと願っていた少年時代。大学に進学し古墳の発掘に本格的に携わるようになって以来、研究が大変なことは常だったが、それをつらいと思ったことは一度もなかった。

少年時代から追い求めてきた歴史の面白さ、未来の群馬を豊かにすることへつながる歴史の知見を、どうしたら多くの県民と共有できるか。これまでの経験を最大限に生かそうと知恵を絞り、迎えたリニューアルだった。

思えばこれまでの人生は、多くの人との出会いによって導かれてきた。だから私の半生記は出会いの物語だ。近くにはいつも私を導き、成長のためのヒントをくれる師や友がいた。自分一人では到底たどり着けなかったはずの場所に立って、私はそんな大切な人たちの顔を思い浮かべていた。

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ❷

出生

同世代多くにぎやかに

私は1948（昭和23）年9月、右島福司、歌子の長男として、当時の境町に生まれた。両親は敗戦により満州から引き揚げてきたばかりで、互いの故郷である境町に身を寄せる形でこの地に暮らしていた。

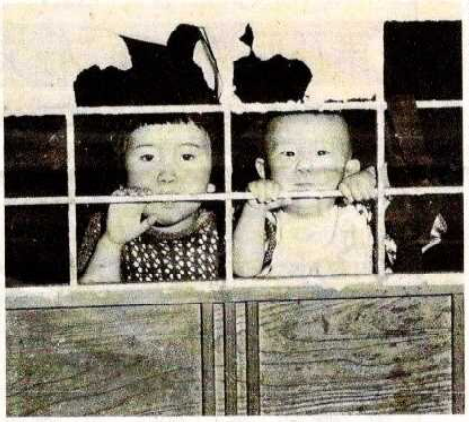
生まれた頃に住んでいたのは、境町の長光寺にあった長屋門にある住宅だった。父の実家は境平塚の天人寺で、長光寺の住職が両親の仲人だったことからこの住まいを借りていたようだ。

私には終戦の年に生まれた3歳違いの姉と、2人の弟がいる。戦後間もない時期で、私の家も周囲の家々も物質的な豊かさには恵まれていなかったが、近所には同世代の子どもがたくさんいて、いつもにぎやかで楽しかった。

父は戦前に講談社に勤めていた元カメラマンで、満州でも雑誌編集に携わった。郷里に戻ってからは写真店を経営し、生計を立てていた。

私は幼い頃から臆病なたちで、怖いもの知らずの姉や父とは随分性格が違っていた。例えば夏に夕立が来ると、幼少期の私は雷鳴が怖くて家の真ん中に逃げ、耳をふさいでじっとしていた。これに対して父と姉は、稲光を見ようと軒先に出ては楽しんでいたのだった。

寺に住んでいるというのは、怖がりの私にとっては大変なことだった。何しろ至近距離に墓がたくさんある。自宅の廊下の先にある便所に行くのも怖かったし、お使いを頼まれて隣組の家に届け物をするのにも墓を通り抜けていかなければならない。わざと私を置いて足早に進もうとする姉の背中を、懸命に追いかけたことを懐かしく思い出す。



カメラマンの父、福司さんが撮影した1歳の頃の右島さん（右）と姉の芳江さん

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ❸

父のこと

写真店、町の文化サロンに

私の半生において父、福司の存在はとても大きい。

父は1915（大正4）年、八甲田山雪中行軍の福島大尉顕彰碑で知られる境平塚の天人寺に、次男として生まれた。活発な少年だったようで、親の勧めで当時の太田中を受験した際、「僧職の道につながる中学には進学したくない」と考えて解答を白紙で提出した。中学校長から後日、小学校長や父親ともども呼び出されて問い詰められたそうだ。

その後上京し、講談社の少年部で「少年社員」として働きながら学ぶ道を選んだ。同社を創設した野間清治が本県出身だったこともあり、当時最先端のメディアの一つであった雑誌制作に携わりたいという思いがあったようだ。

父はここでカメラの扱い方や取材方法などを学んだが、講談社はその後ちょっとした内紛があって退社。新天地として選んだのが、満州に渡ることだった。

満州では自ら撮影し、雑誌編集をする仕事に携わった。故郷の友人の妹に当たる母の歌子と結婚したのもこの頃で、2人は満州で新婚生活を始めた。しかし、程なくして日本は敗戦。両親は着の身着のままで故郷の境町に帰り、母の実家があった境の街中で小さな写真店を始めた。

当初は出張撮影が中心で、瑳珂比神社の境内で七五三のお祝いに来る人たちの写真を撮ったりしたと聞く。父は非常に社交的で、当時のわが家は町の文化サロンのような場になった。地元の文化人がいつも集まっていて、いろいろな大人と触れ合えたことは私にとっても良い経験だったが、肝心の商売の方はお世辞にも上手とは言えなかった。

撮影旅行先の軽井沢で休憩する小学1年生ごろの右島さんと父の福司さん

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ❹

少年時代

小学校で社会科に興味

私が過ごした子ども時代は戦後の復興期。社会全体が貧しくてもにぎやかで「古き良き昭和」のイメージそのものだった。戦後のベビーブームで周囲に同世代の子どもが多く、今は寂しくなってしまった境町もにぎやかだった。

商売は全然だめだった父は余裕などないのに、百科事典や「少年・少女日本の歴史」などの本を買い与えてくれた。娯楽の少なかった時代、これらの本を読むのは楽しく、私の目を開かせてくれた。

当時の家庭では珍しく、頻繁に東京にも連れて行ってもらった。かつて父が勤めていた講談社を訪ねたり、上野や浅草に遊びに行くことが多かった。夏休みには必ず家族旅行に行った。たくさんの経験を与えてもらったのだが、本来わが家にそれほどの蓄えはなかったはずだ。

小学校に入学した私は、姉の影響もあって社会科が大好きになった。姉のテスト対策に付き合って、用語の確認問題を出すうち、同級生よりも随分先まで知識が付いていたようだ。

当時好きだった遊びに「墓調べ」というのがある。9歳ごろまで寺に住み父の実家も寺だったので、大親友の永岡桂一郎君と、近くの墓を調べて回ってはそこに眠る人の生前を想像して語り合った。

5年生の時に担任をしてもらった倉林宣夫先生は、社会科が専門の青年教師だった。小学校の社会科に少々失望していた私に大きな刺激を与えてくれた。専門的で本格的な社会科の授業はいつも新鮮だった。私が中学に進学するタイミングで先生も当時の境中に異動され、引き続き指導していただいた。

小学生時代、弟たちとチャンバラをする右島さん（左）

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ❺

中学時代

古墳や博物館に出合う

境中に入学すると、バスケットボールに熱中した。身長178㌢は同世代でも高い方で、チームではガードとして活躍した。何事にも熱中するタイプの私は、身長を196㌢まで伸ばし、バスケットボールで身を立てようなどと本気で考えていたのだが、3年時に県大会に出場し強豪チームに打ちのめされて、その夢ははかなく散った。

中学に入っても社会科が大好きなのは変わらなかった。バスケットボールの傍ら「郷土クラブ」にも入り、教頭の井田晃作先生の指導の下、近隣の古墳や博物館などを巡った。古墳との最初期の出合いだったと思う。

郷土クラブに参加して初めて行った古墳は、上野三碑の山ノ上碑の隣にある山ノ上古墳だった。当時は富岡市の貫前神社近くにあった県立博物館にも、この時初めて立ち寄った。このような世界があることを初めて知り、新鮮な感激を受けたことを覚えている。後に自分が博物館長になるとは思いもしなかった。

中学時代はスキーにも熱中した。今では考えられないことだが、当時はスキーに熱心な先生がバスを手配してくれて、希望する生徒を日曜に北毛のスキー場へ連れて行ってくれた。それに参加して冬場は月に2回くらいはスキーに通った。スキーはその後、私にとって長く楽しむ趣味となった。

高校進学を控えて、受験しようと考えたのは太田高だった。自由な校風にもあこがれた。父は太田中を受験した時に白紙の答案用紙を提出して自らの人生を切り開いたが、私はちゃんと問題を解いて無事に入学することができた。

バスケットボールに熱中した中学時代。試合開始時のジャンプボールに臨む右島さん（中央）

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ❻

高校時代

授業から歴史学ぶ意欲

1964(昭和39)年の春、太田高に入学した。驚いたのは東毛地区全体から集まってきた友人らが話す言葉のイントネーションが、自分たちとは随分違うことだった。進学校だったのでまずは受験勉強をして大学を目指そうという思いがあり、高校では部活動でスポーツをしなかった。

代わりに友人らと「園芸部」をつくり、週に2日程度は部活動を楽しんだ。金山などを散策し、植物を中心に博物学的な調査をするのどかな活動で、文化祭では八瀬川の桜並木のうどんこ病の被害状況について調べて展示した。

当時の学校の先生というのはみな個性的で、それぞれ自由に活動していた。高校時代の先生方は特に私たちを大人扱いしてくれた。

高校で印象的だったのは、入学時の校長だった笠原治久先生。朝礼で話される内容がいつも重厚で面白く、大変刺激を受けたことを覚えている。

歴史の今尾隆吉先生も忘れられない。私が社会科が大好きだったことは既に記したが、それまではどちらかというと地理の方が好きだった。今尾先生の授業を受ける中で、歴史をもっと深く学びたいと考えるようになった。

大学進学を前に、父の友人で私の家によく出入りしていた郷土史家の金子規矩雄先生から、群馬大に尾崎喜左雄先生という素晴らしい歴史学者がいることを聞いた。自分自身の成績や自宅からも通学できることなどを踏まえて、尾崎先生の元で学ぶことを真剣に考えるようになった。

1年間の浪人生活を経て68(昭和43)年、私は群馬大学教育学部に入学した。

園芸部の文化祭展示会場で来場者に応対する右島さん(中央)

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ❼

群馬大入学

発掘に奔走、考古学三昧

1968(昭和43)年春、私は群馬大教育学部の社会科専攻に入学した。周囲は皆、教師を目指して入学した真面目な人ばかりだった。実際に当時の同級生の大多数は教員になった。

私はといえば、入学後のかなり早い時点で教師にはならず、進学することを目標にしていた。同級生たちが小学校や中学校の教職免許を取るために勉強する中、私は卒業するために最低限の単位しか取らなかった。幸い、父は元来自由な性格で普通の発想ではない人だったから、むしろ喜んで応援してくれた。

入学後すぐに門をたたいたのが「歴史研究部」だった。当時、この同好会と尾崎喜左雄先生の考古学の研究室は直結していた。普段は勉強会を通して先輩たちから考古学を教わり、時間があると尾崎先生からも教えてもらった。

長期休みは全て発掘だった。それ以外でも時々、緊急の発掘調査の機会があった。私は声をかけられたら必ず参加していた。当時は車を持っている学生などいない時代だったから、大学から道具を持ち出して、電車とバスを乗り継いで現地集合するというような発掘調査だった。考古学三昧だったこの時代は好きなことに打ち込めた。私は楽しくて仕方がなかった。

大学時代の大先輩の石川正之助さんには、いつもお世話になった。高校の講師をしながら尾崎研究室に出入りしていて、ずいぶんかわいがってもらった。特に広い意味での読書に関して、徹底的に教えてもらったことは大きい。

石川さんにはその後、私が群馬県に就職して以降もお世話になることになる。

群馬大入学時の右島さん(右)。隣は父の福司さん

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ❽

尾崎喜左雄先生

本県考古学 先導した師

半生において、尾崎喜左雄先生との出会いはかけがえのないものとなった。先生は1904（明治37）年、神奈川県生まれで、旧制静岡高校を卒業後、東北帝大法文学部に入学、翌年退学して九州帝大法文学部に入学する。

元々文学にあこがれていたが、父親の強い希望もあって法律を学んだ。九州大を卒業後に徴兵され、「兵役を果たしたのだから好きなことをやらせてほしい」と父を説得。33（昭和8）年に29歳で東京帝大文学部国史学科に入学した。

東大では当時の権威だった歴史学者、黒板勝美氏の下で古代史を学び、「奈良時代の国民生活」というタイトルの卒論を書いている。重要なのは専門が考古学ではなかったことだ。先生が群馬にやってくるきっかけとなったのが、34（同9）年に本県で実施された陸軍大演習だった。

県を挙げての一大行事だった陸軍特別大演習の際に、桐生市で昭和天皇の誤導事件が発生。責任を取って退任した知事の後任として、君島清吉知事が赴任する。君島知事が打ち出した皇室を敬う政策の一つが、本県が質、量ともに全国に誇る古墳の総合調査だった。そして、全国に先駆けた大規模な古墳の総合調査のデータをまとめるために黒板氏から白羽の矢を立てられたのが尾崎先生だった。

当時の大学における師弟関係で、断るという選択肢はなかっただろう。尾崎先生は423基にも及ぶ古墳を網羅した「上毛古墳綜覧（そうらん）」としてまとめた後、43（同18）年に群馬師範学校に赴任。考古学、歴史学講座の教授として、30年以上にわたって本県考古学をリードする存在となる。

大学生時代、尾崎さん（右）に発掘調査の説明をする右島さん

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ❾

大学院進学

古墳研究なら「西に」

群馬大教育学部に進学したものの、前述のように早い段階で教員にはならず、大学院へ進学しようと考えていた。

尾崎喜左雄先生は私が大学2年の時に定年退官された。その後は先生の自宅に通う形で研究を手伝い、大学院の受験に向けた指導もしていただいた。その中でアドバイスをいただいたのが、古墳と古墳時代が中心テーマなのだから「院へ進むなら西に行った方がいい」ということだった。

古墳時代の歴史をリードしたのは、取りも直さず近畿地方だった。だから古墳時代の考古学研究が進んでいたのもまた近畿だったからだ。

私が進学することになる当時の関西大には、高松塚古墳の調査でも知られる網干善教先生がいた。奈良県立橿原考古学研究所の中心人物の一人としても活躍する先生の下で学ぶため、志望先を関西大に定めた。

進学への準備もあって、群馬大には計5年在籍した。5年時に受講しようとした地理学の有末武夫先生の講義では、他の学生が誰もいなかったため、先生に一対一で英国の中学校の地理教科書をテキストに原書講読をしていただけた。当時の大学院の試験は外国語と専門科目、小論文だったが、私は先生のおかげで英語で高得点を得られた。

この年から関西大では、学外から積極的に院生を獲得する方針に切り替わった幸運もあり、私は1973（昭和48）年4月、関西大学大学院に入学した。しかし、日本史学専攻では「他大学から英語が得意な学生がやってくる」とうわさされていたそうで、そこまで英語が得意でもなかった私は少々面食らった。

群馬大時代に参加した前橋市元総社町での発掘調査現場。手前中央が右島さん

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ⑩

妻との出会い

院進学、大阪で新婚生活

後に妻となる鈴木操と出会ったのは、大学に入学した時だった。私は浪人していたので妻は一つ年下だったが、同じ教育学部社会科専攻の同級生であり、歴史研究部の部員でもあった。

活発で元気の良い女の子、というのが第一印象。前橋の街中の出身で、ダンス部にも所属していた。当時の歴史研究部は考古学研究室と結び付いていて、休日の多くは発掘調査に出かけていた。みな仲が良く、妻とは友人同士の立場から自然に関係が深まっていった。

妻は4年で大学を卒業し、多くの同級生と同様に県内の小学校の教員となった。初任地は中之条町の小学校だった。私は5年間大学にいて、1973（昭和48）年に関西大学大学院に進学。後に知ったことだがこの頃、私たちの関係を知っていた恩師の尾崎喜左雄先生が妻の実家に行き、「お嬢さんを右島君のお嫁さんにください」と両親に頼んでくれたそうだ。先生には仲人を務めていただいた。

結婚したのは大学院1年の冬。妻はその前に大阪府の教員採用試験を受け直し、無事に合格した。12月に父の実家の寺で仏式の結婚式を挙げ、新婚生活は豊中市で始めた。関西で「文化住宅」と呼ばれる2階建て集合住宅で、当時としてはきれいな家だった。

豊中に住んだのは、タイミング良く教員の欠員が生じたためだ。既に群馬の教員だった妻は前倒しで採用され、翌年1月から豊中の小学校に赴任することになった。私は妻に扶養される立場になった。大学院への進学という人生の大きな節目に伴侶を得て、学業に打ち込む環境は整った。

父の実家、天人寺で挙げた仏式の結婚式

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ⑪

大学院時代

研究没頭、長女が誕生

大学院生活のスタート時こそ知り合いが全くいない環境だったが、入学して半年で結婚した。関西考古学研究の中核の一つだった関西大は自由な雰囲気で、京都大や同志社大など他大学との交流も盛んだった。

大学は大学院生を優遇してくれ、図書館の書庫に入って勉強することができた。書庫の隅にある机を使って勉強する毎日だった。

関西大は当時から、東洋史や朝鮮史といった東アジアを視野に入れた研究が盛んだった。私も研究に打ち込み、2年時には韓国への調査旅行にも参加した。その後、長く研究のフィールドとなる韓国への初めての訪問だった。

人から紹介してもらい、大阪市阿倍野区にあった当時の東大谷女子高で講師としても働いた。授業は生徒からの評判も良かったのだが、研究に使う時間を維持できなくなったため、半年ほどでやめることにした。

1975年8月、大阪府豊中市で長女の史子が誕生した。私と娘と2人の扶養家族を抱え、妻は育休をほとんど取らずに職場復帰した。

困ったのは日中に娘の面倒を見てくれる保育所などを見つけられなかったことで、しばらくは妻の教え子のお母さんにお世話になった。当時、保育所の拡大を求める市民団体があったのでそれに加わり、妻は月に1度くらい市役所へ行って嘆願の署名をした。そのような活動をしていれば、保育所に入れる確率が上がると聞いたからだった。

ロビー活動の成果かは分からないが、娘は翌年、無事に市内の保育所に入ることができた。

大阪の豊中時代に生まれた長女の史子さんと妻の操さん

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長　右島　和夫さん ⑫

橿原考古学研究所

濃密な学び、今も関わり

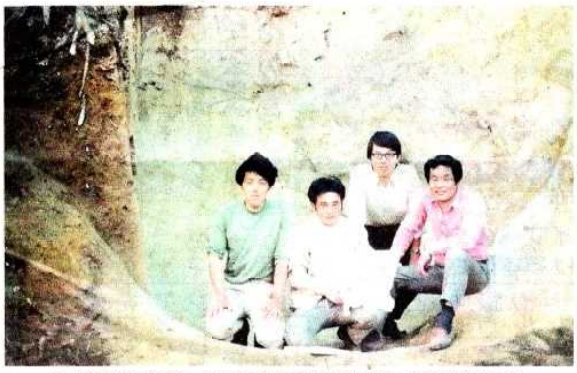
関西大大学院で学ぶ間、足しげく通って学んだのが奈良県立橿原考古学研究所、通称「橿考研」だ。元々は戦前に橿原神宮の用地の発掘調査時に創設された組織で、後に関西大の名誉教授となる末永雅雄先生が私設した。次第に考古学に関心のある中高生、大学生らが集う場所となり、網干善教先生をはじめとする多くの考古学者が育った。

私も院生時代の相当の時間をここで学んだ。夕方まで発掘調査をした後に研究所で酒を酌み交わし、そのまま宿泊するようなこともあった。韓国や中国など海外の研究者らと語り合い、時に小さな講演をしてもらうこともあった。濃密な学びの時間だった。

関東で古墳時代研究に取り組む上でも、同じ時代の畿内（近畿）の動きを視野に入れることが重要で、その後の私の研究のスタイルにもつながっている。2001年から橿考研の共同研究員にしてもらい、現在も特別指導研究員として関わり続けている。

院生時代に出会い、その後に深く交流することになったのが、1学年下の土生田純之君だ。非常に優秀で私と気が合い、考古学談義の相手になってもらっていた。彼は宮内庁に入庁して陵墓の調査に携わることになるが、後に専修大に転じた。私が群馬県教委を退職した後に声をかけてもらい、非常勤講師として同大での授業を長く担当することになった。

古代史の専門家だった薗田香融先生からも多くを学んだ。古墳時代を研究するには古代史の基礎知識も重要だ。「続日本紀」を講読する勉強会に参加させてもらい、先生の豊かな学識に触れられた。



大学院時代、奈良県明日香村での発掘を終えた右島さん（右から２人目）

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長　右島　和夫さん ⑬

群馬県職員に

仕事は発掘、夢かなう

関西大の大学院では計4年間学んだ。修士課程は本来2年だが、修士論文を書くために在籍可能な最長年限まで在籍した。単位を全て取得した後の学費は年間5千円で済んだ。群馬大の恩師、尾崎喜左雄先生から「そろそろ群馬に戻ってこないか」と再三声をかけてもらっていたこともあり、群馬での就職に向けて準備を進めた。

私が就職する少し前、当時の群馬県では関越道、上越新幹線、上武道路（国道17号バイパス）の開設に向け、数多くの発掘調査とそれを担う人員を必要としていた。そのため県は埋蔵文化財の専門職を多く採用したが、私が就職するタイミングではこのような専門職の募集はなかった。

最終的に尾崎先生をはじめ多くの方に助言をいただき、私は県の職員に採用された。大阪府の小学校教員になっていた妻も、同じタイミングでまた群馬県の教員採用試験を受けて無事に合格。1977（昭和52）年、娘を含む家族3人で群馬に帰って来た。

配属先は県教委の文化財保護課で、主な仕事は発掘調査だった。最初の現場は当時の境町の自宅からも近い上武道路建設予定地の発掘だった。「毎日社会科の勉強ができたらどんなにいいだろう」というのが、小中学校時代の私の夢だった。その夢がついにかなったのだから、毎日が本当に楽しかった。

尾崎先生は私が群馬で就職した年の夏頃から、体調が思わしくなくなっていた。そして翌78年1月4日、73歳の生涯を閉じた。私にとっては全く予想だにしていなかった急逝だったため、ぼうぜんとする日が続いた。

就職して２年目に発掘調査を担当した伊勢崎市の下渕名塚越遺跡

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ⑯

北橘村に出向

チームプレーで発掘

2年間の教員生活を経て、県教委の文化財保護課に戻ったのは1982（昭和57）年のことだった。群馬県での関越道の建設は、他県より大幅に遅れている状態だった。理由は豊富な遺跡が発見されていたためで、当時の清水一郎知事としては少しでも発掘調査に人員を振り分けたい事情があった。

同課に籍を置いた状態で派遣されたのが、当時の北橘村教委だった。分郷八崎遺跡の調査に、計4年間携わることになった。縄文時代を中心に旧石器から古代までの大規模な遺跡だった。

旧北橘村に出向していた頃に発掘調査を担当した分郷八崎遺跡

最初の2年間は発掘で、その後の2年間で調査記録と資料の整理に当たった。縄文時代の膨大な遺物が出土し、調査は想定以上に長期化した。

前橋木瀬中での教員としての経験は、発掘調査に大変役立った。大切にしたのはチームプレーの感覚だ。発掘調査は調べる行為の主体こそ私たちだが、実際に発掘する作業員さんたち無しには成り立たない。調査の質を高めるためには、その場にいる人たちとの信頼関係がとても大切だと考えるようになっていた。

作業員さんの名前を覚え、なるべく声をかけてコミュニケーションを重ねる。作業中に貴重な遺物が出土したときにはみんなを集めて解説し、作業の意味を共有できるよう心がけた。

調査のパートナーだった柿沼恵介さんは地元の境町出身で、高校も大学も同窓の先輩だった。教員経験が豊富で、現場をまとめるのが上手な柿沼さんのおかげで、この時期に自分のライフワークに関する研究を進められたことも大きな収穫だった。

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ⑰

富岡・田篠上平遺跡

古墳造る過程に迫る

4年間に及んだ北橘村への派遣の発掘調査任務が終わり、1986（昭和61）年4月から県埋蔵文化財調査事業団に再び出向した。当時の吉井町南陽台に、関越道上越線調査事務所が開設されたタイミングだった。県内の大規模開発を背景に採用された職員の平均年齢は若く、職場は活気に満ちていた。

88年に発掘調査した富岡市の田篠上平遺跡で出合ったのは、直径10㍍程度の円墳だったが、その後の研究への大きな収穫となった遺跡だった。古墳時代終末期に当たる7世紀の2基の横穴式円墳で、調査後には高速道の工事で消滅してしまう古墳だった。

古墳が造られた過程を浮き彫りにした田篠上平遺跡での発掘調査

そのような事情から、この古墳は構造物を丁寧に解体しながら進めていく、可逆的な調査をすることができた。以前から横穴式古墳の構造には強い関心があった。可能な限り詳細に調査することで、古墳が造られる過程を解明しようと考えた。同じ古墳を別の場所で造れるくらいに明らかにする試みだった。

バウムクーヘンを外側から1枚ずつはがしていくような作業で、一つ一つの石の重さを量り、形を確認しながら調査を進めた。たまたま地元から参加してくれた高齢の作業員さんに長く造園業に従事した石に詳しい方がおり、石の性質や扱い方について的確な助言をもらうことができた。

この発掘調査で得られたのは、人々がどのように古墳を造る場所を選び、石を運び、それらを積んで古墳を造ったのかという過程に関する知見だった。古墳の造られ方をリアリティーを持って解明できたことは、後の研究の大きな糧となった。

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ⑱

神保下條遺跡

6世紀、埴輪が大流行

富岡市の田篠上平遺跡の調査の4年後、吉井町（当時）の神保下條遺跡で調査した小型円墳も、新しい研究展開の大きなきっかけとなった。6世紀後半の直径8㍍ほどの小型円墳で、1990（平成2）年6月に調査が始まった。

6世紀になると、日本の中心だった近畿では埴輪があまり作られなくなっていた。これに対し、本県を中心とした関東地方では埴輪が大流行する。数多く生産され、立て巡らされる状況が生まれていた。埴輪を作る専門的な集団や工房の技術は洗練され、一大産地となった。

右島さんたちが製作した神保下條2号墳の復元模型

神保下條遺跡はこの時代の古墳で、古墳が造られた社会的背景を推考することにつながる貴重な遺跡だった。ここで分かったのは、同時期に造られた綿貫観音山古墳の石室や埴輪と比べれば規模も質も到底及ばないが、コンパクトな小円墳が額を寄せ合うように築造され、コンパクトな埴輪がきちんと配列されていたことだ。

これは江戸時代に武家や裕福な商家などでしか飾られなかったひな人形を、昭和のバブル期になると、どの家でも立派な七段飾りを買い求めるようになったというような流行に近い。

小さな古墳とセットで流行した6世紀の群馬の埴輪は、内容としては大きな古墳と同じように王の世界を表現している。王や家臣、馬などの埴輪には、バブル期の七段飾りと同じように、庶民の社会生活の中には本来なかった華やかさや憧れといった思いが込められている。

この遺跡の発掘は、古墳に対する知見をより豊かにしてくれる経験となった。

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ⑲

市史の編さん

地域掘り下げ広い視野

30代となり、本務としての発掘調査と自身の研究に加えて取り組んだのが、県市町村史の編さんだった。就職後すぐに県史の編さんに携わったことはあったが、本格的に従事したのは、1989（平成元）年からの高崎市史、95年の安中市史からだった。

それまでの市町村史編さんは、担当の執筆者がそれぞれの明るい分野や事象について記すのが一般的だったが、高崎市は市史編さんに対する考え方が新しく、市史編さんのために調査研究成果を積み上げていくというものだった。

私はまず、かつて存在したものも含めて市内の古墳を全て実地調査して把握した。当時の週末は、ほとんど高崎に行って同じ古墳研究グループの仲間と調査をしていた。

とりわけ規模の大きな前方後円墳である観音塚古墳は、再度石室を実測調査する機会を得た。小さな古墳の発掘調査をきっかけに、古墳が造られた過程や古墳を3次元で捉えることの重要性を学んだこともあり、より広い視野で多角的な調査ができた。

観音塚の調査から実感するようになったのは、古墳造りは当時の地域社会にとって一大セレモニーだったということだ。古墳を造るというプロセスこそが重要で、60㌧以上もの重さの巨石を運ぶこと一つを取っても、意味のあるデモンストレーションだった。

高崎市という限られた地域を掘り下げて緻密な調査をし、高崎と群馬、高崎と東日本というように対象地域をより広い枠組みと比較し相対化する。市史編さんで得たこの枠組みというべきものへの意識は、古墳とだけ向き合っていたのではつかめなかった。

高崎市史の編さんのために調査した観音塚古墳の石室

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ⑳

博士の学位取得

本県調査の集大成論文に

1977（昭和52）年の春に関西大の大学院修士課程を修了して以来、博士の学位を取得することは大きな目標だった。ただ、日常の業務をこなしながら学位を取得するのは並大抵のことではなく、関西大の恩師の網干善教先生からは再三、「早く研究の成果を博士論文にまとめなさい」と声をかけてもらっていた。

大学院時代の後輩で、宮内庁を退職して専修大に務めた土生田純之さんは、私より先に博士の学位を取得した。彼からも「右さん、早くまとめろよ」と会うたびに叱咤激励されていた。私も30代以降は博士論文をまとめることを常に意識し、こつこつと研究を積み上げる夜が続いた。

博士論文のタイトルは「東国古墳時代の研究」。群馬県に就職してからおよそ13年間分の研究をまとめた、当時の私にとっての集大成だった。

群馬大で尾崎喜左雄先生から学び、先生の勧めで進学した関西大大学院で近畿の古墳に関する知見を集積した。その上で群馬をはじめとする東国の古墳時代の特徴や歴史上の意味を考えた。こうしてつかむことができた視点が、この論文の基層をなしている。

94年5月に論文と同名の本を学生社から出版。関西大から「博士（文学）」の学位を受領することができたのは、95年3月のことだった。博士の学位を取得したことは、人生の一つの節目となった。研究上の環境は改善されたし、大学での講師の依頼を受けるなど、研究活動の幅を広げることにつながった。

同書の出版により、94年12月には第2回石川薫記念地域文化賞の奨励賞を受賞することもできた。

大学院修了後も薫陶を受けた網干さん（右）と右島さん

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

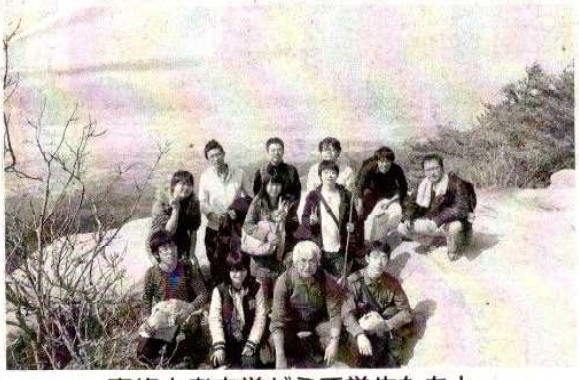
前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ㉑

大学での講義

学生と双方向、刺激に

博士の学位を取得したことをきっかけに、大学での講義を受け持つ機会が増えた。大学院時代の後輩だった土生田純之さんが勤めていた専修大をはじめ、親交があった群馬大の森田悌先生に誘ってもらい、母校の同大教育学部でも教える機会を得た。

元々教育学部の出身で、大学院時代の高校での講師経験や、就職後に中学校教員時代もわずかだがあったわけで、大学での講義には思い入れがあった。学生の反応がしっかりあれば講義は盛り上がり、面白くなる。一方通行ではなく双方向の講義を心がけた。



専修大考古学ゼミで学生たちと出かけた韓国調査旅行

質の高い学生に恵まれたこともあり、若い世代と接して自分自身が良い刺激を得られる大切な時間になった。

当時の私は県職員という立場だったから、大学で教えることには制約もあった。時には職場外での活動であることを理由に不許可とされることもあったが、県職員としてできる社会貢献だという信念を持って取り組んだ。

群馬大で私の講義を受けた学生の中には、その後本格的に考古学の道に進み、現在は県内で活躍している研究者もいる。専修大で教えた学生には韓国で研究を進めている人が2人いる。

彼らとは折に触れて情報交換をするし、近くへ行けば互いに教え合うような関係を築いている。奈良県での発掘に多くの大学の学生が参加していたように、私が学んだ関西の大学では、学閥を超越したニュートラルな関係を築きやすい環境があった。今でも人的なネットワークの広さは自分の武器だと思っているが、大学で教えることで得られたことは本当に多い。

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ㉒

韓国での学び

古代群馬への影響実感

ライフワークの一つに、韓国をフィールドにした研究がある。群馬の古墳を東日本、近畿、日本列島全体と比較しながら研究していく中で、東アジアという視点が生まれるのは自然な流れだった。

韓国との出合いは大学院生時代で、研究室の調査旅行で行ったのが最初だった。以降は遠ざかっていたが、博士号を取得した後に新たなステップとして、より大きな枠組みから群馬や東国を捉えたいと考えるようになった。

私がこのような考えを持つに至るのと同様に、韓国の研究者にも日本の考古学研究に関心を持つ人が増えてきた。釜山大の申敬澈名誉教授はその1人で、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で在外研究をしていた。県埋蔵文化財調査事業団にいた頃に親しくなり、現在も交流している。

九州大と釜山大とは毎年、共同研究会を開いていた。博士の学位取得後、九州大の西谷正教授を介して韓国での研究会に参加し、多くの韓国研究者と知り合うことができた。釜山大で開催された時、終了後に専修大の土生田純之さん、岡山理科大の亀田修一さんと3人で韓国の遺跡や博物館を巡ったことが、本格的な東アジア研究のスタートとなった。

2000年代に入り、土生田さんが在外研究員として1年間、韓国・大邱の啓明大に留学したことも大きかった。下宿先のマンションに2週間ほど転がり込み、電車やバスを乗り継いで丁寧に韓国中の史跡を巡りまくった。韓国考古学を肌で感じる経験を得て、古代韓国から群馬に多くの文化や人が流入していることを実感するようになった。

韓国・慶尚北道の古墳の調査を見学する右島さん（中央）

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ㉓

日韓で相互研究

東日本の古墳に熱視線

群馬県周辺には東日本の中でも特に、5世紀から7世紀にかけて朝鮮半島・中国からの渡来人が多くやってきた。その関わりの深さを象徴する一つが上野三碑といえる。

当時の朝鮮半島は倭国との関係が深く、政情が不安定な時期だったので多くの人材が日本に渡ってきた。また、当時の日本社会がこうした人材の渡来を熱望した。朝鮮半島との往来は、後の日本文化の礎となっていく。日本の歴史を知るために、東アジアという枠組みを学ばなければならないのはそのためだ。

例えば当時の日本には文字がなかったが、漢字を使って日本語を表すことができるようになったのは、渡来人がやってきたからだ。古墳時代に最先端の学問や技術、宗教が朝鮮半島からもたらされた。朝鮮半島の文化をたどることが、日本や群馬の古墳の正しい理解につながっていく。

博士論文の執筆以降、私の関心は古墳がいかに造られたのかという問題になっていた。2003年、同じ問題意識を持つ専修大の土生田純之さん、韓国・大邱にある啓明大の曺永鉉さんらと、日韓の古墳構築研究をテーマにした共著を出版した。これを機に韓国の学会のシンポジウムや講演会に呼ばれることが増え、月に3度韓国へ行くようなこともあった。

韓国の研究者との親しい交流は今も続いている。かつては韓国研究者にとって、日本の古墳の研究対象は近畿までだったが、最近は東日本にも熱い視線を向けるようになった。先日知人から、韓国の研究者らが私のことを親しみを込めて「群馬王」と呼んでいると聞いて、大変驚いた。

日韓考古学の共同研究の集まりに参加した右島さん（左）＝韓国・公州

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ㉔

三軒屋遺跡

超一級と説き保存決定

伊勢崎市教育委員会が古代の佐位郡衙の正倉跡とみられる遺構を発見したと発表したのは、2005年7月のことだった。当時は県文化課で課長級の文化財主監という立場にあったため、この遺跡には深く関わることになった。

現在の文化財行政においては市町村への権限移譲が進んだが、当時の県には市町村から発掘調査の情報が上げられ、その許認可を判断するという役割があった。伊勢崎市は当時、殖蓮小の体育館建設工事のために発掘調査を計画していた。市の当初の方針は調査後に遺跡を残さない「記録保存」だったが、県としては「まずは掘ってみて、どんな物が出るのかをきちんと確認してほしい」と伝えた。

試掘の結果、現れたのは八角形の正倉跡だった。上野国の郡衙は、全国で唯一残る「上野国交替実録帳」という国司の交替時の引き継ぎ書と照らし合わせることができる点に意味がある。実録帳では佐位郡の正倉のところに「八面甲倉」と出てくることから、発見された遺構と文献記録が一致している。遺跡の価値は超一級と言えた。

ただ市は当初、遺跡の保存に積極的ではなかった。私は市の文化財関係者と協議を重ね、「この状況で残さなければ、市長が批判の矢面に立つことになる」と説いた。当時の矢内一雄市長が定例会見で遺跡の保存を発表したのは、その直後のことだった。当時は合併により新市が誕生して間もない時期。矢内市長が「この発見は古代人からの伊勢崎市への贈り物だ」と述べたことが印象に残っている。

三軒屋遺跡は14年、国史跡となった。

2014年に国史跡となった三軒屋遺跡
（伊勢崎市教委提供）

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ㉕

妻との別れ

最大の理解者失う

2006年2月、妻の操が亡くなった。57歳という早過ぎる死だった。私にとって最大の理解者だった妻の死は、その後の生き方にも大きな影響を与えた。

私たちは群馬大教育学部の同級生。妻が先に卒業して県内で教員となり、私が関西大の大学院に進学して間もなく結婚した。院生時代は大阪府の教員採用試験を受け直して合格した妻が、家計を支えてくれた。無収入だった私は妻の扶養となり、4年間学ぶことができた。

結婚から2年後には長女が生まれ、私が群馬県教委に就職したのを機に3人で古里に帰った。妻は3度目の教員採用試験にも合格し、地元の小学校を中心に勤務した。

妻は社会科教育の専攻だったが、学生時代から科目で言うと家庭科の分野が大好きで、料理、手芸、機織りなどに打ち込んだ。共に所属した歴史研究部以外にも創作ダンス部に入り、持ち前の活発さを発揮していた。就職後に民舞と出合い、元来の踊り好きもあって熱中した。北海道と沖縄の文化を学び、わが家の2階には関係する衣装や楽器、書籍があふれる「民舞の部屋」が今もそのままである。

群馬に戻ってから長男の健が生まれ、学生時代は「ミーちゃん」だった妻の呼び名は長い間、「お母さん」になっていた。がんの転移が分かってからは苦しい闘病生活だったが、最後の時は当時米国で勤務していた長男も帰国し、家族4人の時間を持てた。

葬儀には勤務する伊勢崎境剛志小の他、それ以前の境地区の小中学校の教え子、保護者、友人らが大勢駆けつけ、妻を送り出してくれた。

最大の理解者だった妻の操さん

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ㉖

退職

シリア・パルミラで発掘

最大の理解者であり、研究をずっと後押ししてくれた妻に先立たれたことは、大きな心境の変化をもたらした。どうしたら妻に恩返しできるだろうと考えてたどり着いたのは、さらに研究を進めていくという答えだった。

以前から、幅を広げて研究しようという意識はあった。これまで古墳中心だった研究対象は世界へと広がり、外部で講演する機会も増えた。多くの研究者や組織との研究交流も深まっていった。

妻が亡くなって2年後の2008年3月、31年間勤めた県教委を退職した。当時は県庁の課長級の文化課文化財主監という立場にあった。定年まで1年を残して退職したのは、少しでも早く辞めることで、研究に専念する意思を揺るぎないものにしたいという思いがあったからだった。

1年早く辞めたことは外部にも広まり、退職と同時に複数の大学から非常勤講師への就任要請をいただいた。金銭面よりも研究環境を優先して決めた退職だったが、友人や交流のある研究者の存在に感謝した。幸い退職後の研究は、予定通り充実したものとなった。10年からは大学院の後輩の西藤清秀さんとの縁で、シリアのオアシス都市、パルミラでの日本の調査隊による発掘に参加した。

古代ローマ期の城壁を造る工事用スロープは日本の古墳築造に通じる点があったし、スロープの解体現場からは、いけにえとみられる乳児の遺体が30体以上見つかり、殉葬と呼ばれる埋葬の形について学ぶことが多かった。比較考古学という学問領域になるが、研究の視野を広げることができた経験だった。

シリア・パルミラでの発掘調査に参加した右島さん（右）

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ㉗

金井東裏遺跡

甲人骨、最上級の価値

上信自動車道（高規格自動車専用一般道）の建設のために発掘調査をしていた渋川市の金井東裏遺跡から、すごい発見があったという一報を受けたのは、2012年11月のことだった。県教委を退職後、県埋蔵文化財調査事業団に理事という肩書をもらっていた。発掘現場からの相談を受ける機会も多かった。

発見の翌日に連絡をもらい、遺跡に駆けつけた。出土した「甲（よろい）を着た古墳人」を見て、世界的に見ても最上級の価値の資料であることを強調し、倒れていた人物の発掘には骨の専門家を呼ぶべきだと進言した。推薦したのが、旧知の仲で日本考古学協会長も務めていた九州大の田中良之教授だった。

田中さんは考古学の出身でありながら、同大医学部の解剖学教室で助手となって経験を積み、人骨の考古学研究のスペシャリストになった人物だ。「群馬で面白い遺跡が出たら呼んでよ」と言われており、甲古墳人発見の翌日に連絡を取った。

田中さんは水や食べ物を通して人間の歯に含まれるストロンチウム同位体を分析する手法に取り組んでいた。分析から、骨が見つかった男女は榛名山麓で生まれ育ったのではなく西から来たこと、顔には渡来系の特徴があり、馬の生産に関わった人物である可能性があることも分かった。

この発掘に田中さんが果たした役割は計り知れない。調査に一応の見通しがついた15年1月、都内でシンポジウムが開かれた。しかし、その直前に末期のがんが見つかっていた田中さんはわずか2カ月後に亡くなられた。61歳の若さだった。

渋川金井東裏遺跡で発見された甲を着た古墳人を前にした田中さん（左）と右島さん（右から2人目）

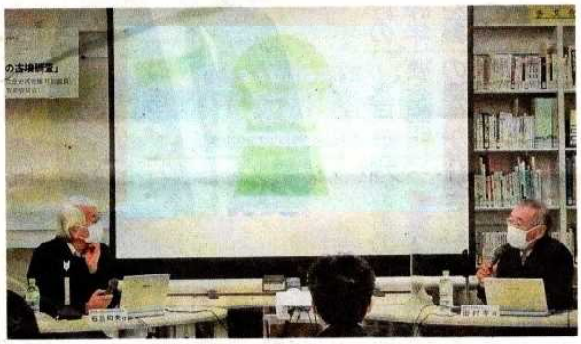
これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長　右島　和夫さん ㉘

尾崎喜左雄博士展

恩師の資料群、未来へ



2021年の尾崎喜左雄博士展でトークショーに臨む右島さん（左、群馬大総合情報メディアセンター提供）

退職後に幾つかの大学で非常勤講師として勤めるようになり、母校の群馬大でも再び講義を受け持つ機会を得た。以前からずっと気がかりだったのが、尾崎喜左雄先生が大学に残された資料群だった。

尾崎先生は上毛古墳綜覧（そうらん）のための調査を皮切りに、約300に及ぶ群馬県内の古墳を調査した。現在その功績は多くの人に知られるようになったが、膨大な記録や出土資料を整理し、価値付けをする作業は進められてこなかった。先生は群馬大を退官するに当たり、貴重な資料を全て大学に託していた。しかし、それらのほとんどは手つかずの状態で、学内のプレハブ収蔵庫2棟の中に置かれたままになっていたのだ。

在職中から母校で講義をするたび、この資料群に光を当てたいという思いが募った。そこでまずは資料の存在を多くの学生や県民に知ってもらおうと、2015年に初めて「尾崎喜左雄博士展」を企画。本県古墳研究の父として、恩師が果たした役割を公開することにした。

その後、共同教育学部の学部長に、交流のある歴史学者の藤森健太郎さんが就任。相談した結果、温度管理などができる施設を群馬大に新たに造って資料を保管することは難しいだろうという結論に至り、所蔵は群馬大のまま、全ての資料を県立歴史博物館に寄託することになった。

博物館に寄託されることで、これらの資料を博物館で活用していくことができる。膨大な資料の整理にはかなりの時間がかかるだろうが、尾崎先生の資料を未来に伝えていくことは、教え子としての大切な務めだと考えている。

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長　右島　和夫さん ㉙

歴博の改革

県民に最先端の研究成果

県立歴史博物館の改革を進めた右島さん。館内のイラストは自身がモデルだ

県立歴史博物館長への就任を打診されたのは2016年だった。当時の歴博は空調設備の不具合のため国の重要文化財に水滴染みをつくる事故を起こし、公開承認施設の資格を取り消された状態にあった。施設自体の老朽化もあり、博物館として抜本的な大改革を進めようとしていた。

2年近くに及んだ大改修と並行して、リニューアルに向けた検討委員会が組織され、私もその一員となっていた。アドバイザーとしての期間が1年ほどあったが、県は当時既に私を館長にするという考えがあったようだった。

博物館の役割は、研究と普及という二つの側面がある。同館では00年から2年間、教育普及課長として勤務した経験があり、博物館がもっと子どもたちや一般県民に目を向けていくべきだという思いがあった。

博物館で進む最先端の研究成果を県民に提供する。17年にグランドオープンした歴博はこれを大方針に、時代ごとの通史展示ではなく、入り口で綿貫観音山古墳の出土品を紹介した。この遺物は20年に3346点の出土品が一括して国宝となった。

実はその2年ほど前に文化庁から非公式に連絡を受け、指定に向けて対象となる全ての資料を1点1点チェックする準備作業を進めていた。群馬を象徴する歴史遺産として、入り口に設けた1室は国の事業を活用して「国宝展示室」となり、歴博の価値をさらに高める存在となった。

その後も国の事業を活用し、デジタル技術を生かした展示を強化した。生まれ変わった歴博の運営に携われたことは私の大きな誇りだ。

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。

心の譜

前県立歴史博物館特別館長 右島 和夫さん ㉚

子どもたちへ

「楽しいこと」見つけて

今年3月、9年間務めた県立歴史博物館の特別館長を退任した。少々急な退任だったが、以降の生活はとても充実している。

一番良かったのは、ずっと向き合いたいと思っていたことに時間をかけられることだ。今更ながら豊かな自分の時間をワクワクしながら過ごしている。これまでずっと突っ走ってきたが、私の研究もいよいよ集大成の時に差しかかっていると感じる。

研究自体には決して終わりはない。これまで続けてきた研究は、生きている限りずっとやり続けることになる。研究を完結させるのではなく、バトンタッチする時期が近づいているという感覚だ。

現在取り組む伊勢崎市史の編さんでも、多くの若い人たちと共同で事に当たっている。私自身も群馬大の歴史研究部、奈良県立橿原考古学研究所など、師や友に学び育ててもらう場に恵まれた。私が研究を続ける中で、その業績を引き継いでくれる人たちが出てきてくれるのだと思う。

最後に未来を担う子どもたち、そして大人にメッセージを贈りたい。楽しい、面白いと思うことを見つけてほしい。大人は子どもがそれを発見できる環境をつくってあげてほしい。子どもだった私は自分でそうしたくて、勝手に土器を拾いに行った。熱心な親は子どもと一緒に行き、一緒に調べようとするかもしれないが、それは少し違う。子どもの世界に先回りしてレールを敷いてはいけない。

大人の皆さんにもぜひ、楽しいと思うことを探してほしい。私たち現代人は、「楽しさ」の質が問われる時代を生きているのだから。(おわり)

特別館長を退き、職員から花束を贈られる右島さん＝3月

これまで紹介した「心の譜」はニュースサイト「上毛新聞電子版」から有料で全て読めます。